『普遍的建築のアイデア』(1615)に対する批評について

—ヴィンチェンツォ・スカモッツィ研究の可能性を巡って—

ON VARIOUS EVALUATIONS OF “L'IDEA DELLA ARCHITETTURA UNIVERSALE (1615)”

—Around the possibilities of the study on Vincenzo Scamozzi—

下川 勇*

Isamu SHIMOKAWA

This paper aims to find out the possibilities of the study on the architect and theorist Vincenzo Scamozzi in the 16th century Italy, through various evaluations of his book “L'Idée della Architettura Universale”.

The public did not pay much attention to Scamozzi, because he was regarded as a second-class architect. The main reason behind such an opinion was that his book was very difficult to comprehend. In this paper, we deduce the problem of “L'Idée della Architettura Universale” through the background of publication of his book in the Netherlands, England, and various evaluations of his book in the Germany, France and Italy. And we point out the need of the considerations of the theory and thought of the architecture that were not studied systematically heretofore.

Keywords: “L'Idée della Architettura Universale”, Vincenzo Scamozzi, Circumstances of the publication of the Netherlands and England, Circumstances of the critique of Germany·France·Italy
『普遍的建築のアイデア』、ヴィンチェンツォ・スカモッツィ、オランダとイギリスの出版事情、ドイツ・フランス・イタリアの批評事情

序.

周知の通り、盛期イタリア・ルネサンスの建築家・建築理論家ヴィンチェンツォ・スカモッツィ (1552-1616 年) は、これまで二流の建築家と見なされ、大きく取り上げられることがなかった。その要因は色々考えられるが、大きなものとしては、パツラーディオの存在と『普遍的建築のアイデア』(以下、『アイデア』と表記) の内容を挙げることができるであろう。スカモッツィは、同郷のパツラーディオが既に建築家として活躍していた1552年に生を享けているが、身近であったパツラーディオの存在は、あまりにも大きすぎたことであろう。スカモッツィは、パツラーディオの足跡を追うことになり、歴史の舞台裏に隠れてしまうことになった。そして『アイデア』については、そのなかのオーダーの論考は、ルネサンス最後の業績ということから各国の古典主義者に尊ばれたが、その他の論考に関しては、あまり良い評価を得ていない。イタリア・ルネサンス建築の結実という点、そして、偏重的ではあるが、各国に与えた影響という点で、スカモッツィは我々に大いなる期待を与える存在ではあるが、『アイデア』の不評を考えるならば、スカモッツィ研究の発展性には疑問が生じるところであろう。そうしたことから、本論文は、これまでの『アイデア』批評を再検討し、そこにスカモッツィ研究の

可能性を見出していこうとするものである。

以下の考察においては、幾つかの国々を抽出し、それを二つの章に分配している。第一に、『アイデア』の翻訳・編集・出版が早期であった、オランダ、イギリスにおける出版背景を紹介する。ここでは各国の批評家が下した『アイデア』への酷評の原因となるものを排除することによって、『アイデア』の質を高めようとする様子などが見られることになるが、この観点から『アイデア』の評価を汲みとっていく。第二に、実際に『アイデア』を論じる批評家が輩出されているドイツ、フランス、イタリアを抽出し、『アイデア』像、延いては建築家像の形成に直接的な働きかけをした幾人かの重要な批評家をそれぞれ挙げ、その批評の傾向を導く。これらの考察を通じて、『アイデア』の性質を確認し、その上で、スカモッツィ研究の可能性を考えてみたいと思う。

1. オランダ、イギリスにおける出版背景から見る『アイデア』批評

1-1. オランダ

17世紀オランダにおいて、イタリア・ルネサンスの建築書の出版が盛んであったことは周知のとおりである。この背景には、ヨーロッパ北方では比較的早い時期の16世紀前半において、すでにイタ

* 福井大学大学院工学研究科博士後期課程 大学院生・工修

Graduate Student, Graduate School of Eng., Fukui Univ., M. Eng.

DELL'IDEA
DELL'ARCHITETTURA
UNIVERSALE
DI
VINCENZO SCAMOZZI
ARCHITETTO VENETO.
PARTE SECONDA, LIBRO SESTO.

CHE IN TUTTE LE COSE NATURALI, ET
Artificiali dee esser l'ordine: e quanti, e quali siano gli ordini nel-
l'Architettura. Capo I.

RECORDA dalla diffinitione delle cose generali più facili che si viene in cogni-
tione delle speciali, e dipendenti da esse, (come habbiamo da Aristotele,) Principio a molti
fonti tanquam locus in quo in domo quoniam uultu ignarus; perciò hauendo ne' prece-
denti libri trattato di tutti i Generi d'edifici Publici, e privati così facili, come so-
liti, hora in questa seconda parte incominceremo a ragionare de' gli ordini del-
l'Architettura, & anco per consequenza de' gli ornamenti per qualunque sorte d'e-
difici. Ma per molto conueniente, che prima andiamo inuidiando se gli edifici
deono esser ornati, e che cosa sia ordine, e quanti, e quali, e simiglianti cose, affine che possiamo venire
in maggior cognitione dell'esse, e dopo di uisitaremo de' loro Generi, e specie: e finalmente delle loro
parti; e cembra con quella chiarezza, che sarà possibile, offerendo quello, che dice Aristotele. *Sermo.* a. *Etia*
omnis tractari debet quasi per figuram non per ueritatem de figuris. Eparimento: *Omnia forma figurarum fac-
tus quam oportet, & sicut intellectum, & longius difficile erit ueritatem, & difficile obliuionem inducit.*
E VENEZIA alla prima effusione l'ordine dee esser in tutte le cose, & inuenire recurre co-
fusione, & il tutto si ne direbbe a quel Caso imaginato da Anaxagora, o fauoleggiato da Poeti, di-
ciamo: che ragione uolente l'Architettura, come effecce di gentia prefantissima, ha da hauere or-
dine: & che questo sia uero (e' lecito a parlar delle cose superiori) basta a dire, che la Machina del
grande Iddio, creasse tutte le cose di forma perfectione, & di giustissima uolità, e commodità al Mon-
do, e finalmente di forma bellezza, e uenustà, e uirtutà le accompagnò, con sommo decoro, & or-
dine: affine (come credono i speculatori,) che più agiatamente scindessero al genere humano, e
comparissero con maggior grata. Di modo che in qual modo esse si ritrovano, senz'altro fanno vo-
luntario incomparabile a quella Machina del Mondo, e rendono una corrispondenza ineffabile,
come potiamo considerare ne' Cielu la stà, e comprendere chiaramente nelle cose, che sono tra noi:
Laonde quelli sono stimati tanto più nobili, quanto ueramente nel corso loro sono più ordinati, & pre-
cedono a gli altri, & anco perchè molti ornati di maggior numero di belle, e dallo splendor lo-
romolto più abbelliti.

A E XIA

Fig. 1: 『普遍的建築のアイデア』第六書第1頁, Vincenzo Scamozzi, L'idea della
Architettura Universale, Centro Internazionale di studi di
Architettura Andrea Palladio, 1997.

リア・ルネサンス建築への関心を抱いていたという土壌がある。オランダ（ネーデルランド）におけるイタリア・ルネサンス建築への関心は、建物へのオーダーの使用に関するものであった。したがって、オーダーの詳細を論じているセールリオやヴィニョーラやパッラーディオやスカモッツィ等のイタリア・ルネサンス建築書が、オランダ（ネーデルランド）の建築家の関心を惹いたことは、容易に理解することができる。『アイデア』の出版に携わった代表的な編集者として、以下の三人を挙げることができる。この三人によって、オランダにおける『アイデア』出版の大凡の方向性が得られるであろう。

1615年、ヴェネツィアにおいて出版されたスカモッツィの『アイデア』は、早くも1640年にオランダにおいて翻訳・出版されている。出版に携わったコルネリウス・ダンケルツ（Cornelius Danckerts, 1603-1656）は、オランダにおける最初の建築書でありオランダ建築の大きなひとつの潮流を形成した、彫刻家・建築家ヘンドリック・デ・カイザー（Hendrik de Keyser, 1565-1621）の『近代建築』（1631）を刊行した編集者として知られている⁷⁾。C.ダンケルツが携わった『アイデア』は、第六書のみを扱った抄本であるが⁸⁾、オーダーに関する詳細な寸法付きの図版とその解説とが載せられている。この第六書を出版した経緯には、建築業者の要求とそれともなう利益とが見られることから、オーダー論が掲載されている第六書が、時代の要求に応えることのできるものであったことが推察できるであろう。尚、この翻訳本には、図版に関する一部の解説がそのままイタリア語として残されている⁹⁾。

C.ダンケルツ版『アイデア』第六書刊行の17年後、アムステルダム

の『アイデア』の翻訳本が出版されている⁴⁾。ボスブーム版は、『アイデア』第六書を簡略化し、実用的なものに翻訳・改訂したものである。これには、ダンケルツ版の残余のイタリア語を排除し、オーダーの理解に必要な概念のみを残すという方法がとられている。また、豪華な二折判のC.ダンケルツ版とは対照的に、ボスブーム版は簡素な四折判形式を採用している¹⁰⁾。この分りやすく経済的なボスブーム版は、建築業者ばかりか学生や研究者にも大いに容認され、1670、1682、1686、1694、1715、1760、1774、1784、1816、1821年に再版が重ねられている¹¹⁾。こうした経緯からわかるように、ボスブーム版はオランダにおけるオーダー論の理解に大きく貢献した。さらに、この度重なる再版は、オランダにとどまらず、オーダーに関心をもつ各国の建築家、建築理論家にまで影響をもたらした。

1658年、C.ダンケルツの嗣子ダンケルト・ダンケルツ（Danckert Danckerts, 1633/4-1666）によって『アイデア』の第三書、第六書の合併版が出版されている⁷⁾。無造作なボスブーム版を批判する形で出版されたD.ダンケルツ版は、C.ダンケルツの意向に従いつつ、体裁を豪華に整え、オーダーを理解するためには大きな図版が必要であるとの考えで、二折版を採用している。しかし、イタリア・ルネサンスの建築書の価値を正しく理論と実践に見出していたD.ダンケルツは、ボスブーム版の実用性をも理解し、これを同版に加えている⁸⁾。

尚、ボスブームは1657年版の増版において、D.ダンケルツ版の欠陥を指摘し、D.ダンケルツの批判に対抗している。これ以後、両者の言い分は、広く関係者に波及し、長きにわたり論争が繰り返された⁹⁾。だが、結果として、こうした論争が『アイデア』の度重なる再版を促し、各国への『アイデア』の普及を助けたと言えるであろう。

1-2. イギリス

オランダ同様、イギリスにおいても実用的に改訂された第六書が出版されている。イギリスにおいて最初に紹介されたイタリア・ルネサンスの建築書は、順に、1611年のロバート・ピーク（Robert Peake）版セールリオの建築書、1655年のジョーセフ・マクソン（Joseph Moxon）版ヴィニョーラの建築書、1663年のゴッドフリー・リチャーズ（Godfrey Richards）版パッラーディオの建築書、そして、年代が明確なものとして、1669年のウィリアム・フィッシャー版スカモッツィの建築書である。これらの英訳版イタリア・ルネサンス建築書は、1600年代後半に、次々と重版されている。こうした状況から推察できるように、イギリスにおけるイタリアの建築論（オーダー論）への関心は、1600年代後半以降に強められていったと考えることができる。

イギリスにおけるスカモッツィの建築書については、その他のイタリア・ルネサンスの建築書と同様に、オーダーに関する第六書が普及している。代表的なものとして、上記のウィリアム・フィッシャー版¹⁰⁾、ボスブーム版を英訳、改訂したジョン・リーク（Jon Reek）版（1676）¹¹⁾を挙げることができる。

フィッシャーは、D.ダンケルツの嗣子ユストゥス・ダンケルツ（Justus Danckerts）版『アイデア』第六書（1662）から大きな影響を受け、それを翻訳、改訂している。J.ダンケルツは、D.ダンケルツ版『アイデア』所収の建築作品集から示唆を受け、ヨアヒム・シュイム（Joachim Schuytm）の助力により、第六書の抄本を出版した。

フィッシャーは、このJ.ダンケルツ版を翻訳し、その図版を忠実に再現しているが、J.ダンケルツ版の実用性に満足せず、製図機械製作者ジョン・ブラウンの論文を付け加えた。この論文は、あらゆる部分に容易に線を増減させたり、二つの線や数字の平均を割り出したりする方法を紹介した、極めて実用的なものである。フィッシャーは、「我々の国家の全ての建築家、愛好家、実務家」のために、理論と実践を兼ねた抄本を制作した¹²⁾。

実用性を考慮したボスプーム版は、オランダにおいては大いに容認されたが、イギリスにおいてはフィッシャー版の方がより大きな成功を収めている。『アイデア』第六書の内容を大きく削除したボスプーム版に、リークは、シュイム考案のスケールを挿入している。これは、J.ダンケルツ版よりも優れたものを制作するために計画された。だが、シュイムが大きく介入したことによりボスプーム版以上に実用性を深めたJ.ダンケルツ版の訳本が広く普及したため、結果的に、リーク版は二次的な役割を強いられた¹³⁾。

Fig. 2: 『普遍的建築のアイデア』所収の五つのオーダー, Vincenzo Scamozzi, *L'Idée de l'Architecture Universelle*, Centro Internazionale di studi di Architettura Andrea Palladio, 1997.

以上、オランダ、イギリスにおける『アイデア』の出版背景を見てきたが、その特徴は、オーダー論や図版が掲載されている第六書の実用性を高めるための様々な工夫に見られる。オランダでは、ダンケルツ一族が、図版の見やすさや権威の象徴としての体裁を配慮したのに対し、ボスプームが冗長な説明を排除し、経済性を配慮することによって実用性を高めた。イギリスでは、このようなオランダ版を基に、新たなスケールを挿入したり、実際の論文を付け加えたりすることによって実用性を獲得した。こうした配慮は、建築関係者の要求に応えるためのものであったと考えられるが、冗長な部分を排除したり、イタリア語をそのまま残したりするという方法を

とっていることなどを考慮すると、第六書（延いては『アイデア』）の実用性の乏しさ（言い換えれば扱いづらさ）が要因になっているとも考えることができるであろう。また、第六書の普及状況を考えると、スカモッツィのオーダー論が各国に与えた影響は無視できないであろう。以上のことが、『アイデア』の出版背景からわかり得ることである。

2. ドイツ、フランス、イタリアの批評家における『アイデア』に対する批評

2-1. ドイツ

ドイツにおける『アイデア』批評については、『アイデア』の初版を手掛けたヨーゼフ・ホフマン (Josef Hofmann) が、オランダやイギリスとは異なり、すでに『アイデア』を厳密に紹介しようとした経緯を見ると、フランス同様、一種の厳格主義的趣向が大きく影響していると考えられる¹⁴⁾。

こうした主義的趣向を持ち、『アイデア』像を浮き彫りにした重要な人物として、高名な数学者、理論家、作家レオンハルト・クリストフ・シュトゥルム (Leonhard Christoph Sturm, 1669-1719) をあげることができる。おそらく、『アイデア』に対する酷評を述べた最も早期の人物であると思われる。シュトゥルムは、オーダーに強い関心をよせ、厳格なる古典主義を擁護したフランス建築アカデミーの創始者ニコラ・フランソワ・ブロンデル (Nicolas-François Blondel, 1617-1686) の『建築講義』に追随する意向を示している¹⁵⁾。従って、シュトゥルムのスカモッツィへの評価は、全体として肯定的であると言える。スカモッツィをセールリオやヴィニョーラやパッラーディオと比較しながら、シュトゥルムは、セールリオやヴィニョーラと比べてパッラーディオとスカモッツィが純粋な態度で振舞っていたと評価し、オーダー論については、優れた調和の原理を持っていたことを指摘している¹⁶⁾。しかしながら、シュトゥルムはスカモッツィの欠点を正しく見出し、セールリオ、ヴィニョーラ、パッラーディオとの間に、建築的正統の観点からオーダーの表現方法を述べた理論家ニコラウス・ゴールドマン (Nicolaus Goldmann 1611-1665) を立て、その長所と短所とを融和させようとした。この過程でシュトゥルムは、ゴールドマンが「学知の粹組みの中で建築が規定されて以来、今日まで建てるのが芸術と同じように伝えられるのではなく、優れた根拠や品格のあるオーダーによって、哲学と同じように伝えられていることを示している」こと、そしてオーダーに関して「ヴィニョーラの軽快さと、スカモッツィのオーダーを規準とした判断で、それら（五つのオーダー）を組み立てている」ことを知ったのである¹⁷⁾。こうして『アイデア』への高い評価を強めていったシュトゥルムではあったが、しかし『アイデア』の読解は時として、シュトゥルムに大きな弊害を与え、以下のように語らしめた。

「私はスカモッツィの壮大な作品〔訳註：『アイデア』〕にもっと期待していた。数学的才能を十分に備えていると思っていたが、職人にしてみれば荷馬車の方が使い勝手が良い。この未熟者は、プロポーションや美の正しい通り道のような繋がりを軽視していないし、一応は古代の遺跡をもとにオーダーを制作している。仮に根拠を明示しなくとも、その根拠から素晴らしい

プロポーションを導くことは可能であろう。ところがスカモツツィにおいて、このこと全てはより深められた仕方であらわれている。この作者の鈍重さと、例え極めて計算の得意な教師であっても説明する術を知らないであろう奇妙な数は、私の仕事をあまりにも耐えがたいものにし、結局はうんざりにもさせた。しかも、あまり必要でないのに、時折道理に反してまで、アリストテレスやプリニウスやその他大勢の章句が引用されているのを見たときには、私はしばしばこの作者の博学に疑念さえ抱いたことを認めざるをえない。いずれにせよ我々は、完全に不相応な宝飾品を見せびらかすこの者が犯した過ちについて、恐れることなく批判しなければならない。」¹⁸⁾

こうしたシュトゥルムの見解を見ると、その『アイデア』批評には肯定的なものも見られるが、不明瞭な数字の値、無意味な深慮、冗長な説明、不必要な引用句などが物語る『アイデア』の性質の数々は、すでに正しく指摘されていることがわかる。

2-2. フランス

フランスにおける『アイデア』批評については、N.F.ブロンデルに端を発し、『アイデア』第六書を有用に翻訳・改訂した建築家、作家シャルル・オーギュスタン・ダヴィレ (Charles Augustin d'Aviler, 1653-1701) の偉業を経て、考古学者、建築・芸術理論家カトルメール・ド・カンシー (Quatremère de Quincy, 1755-1849) がイタリアの批評家から影響を受け、否定的な像を確立した。ここでは、『アイデア』像 (延いてはスカモツツィ像) を確立したと言われている (ミリーツィアやテマンツァの『列伝』以上に、その『百科全書』が広く普及したことが、確立者の由縁と思われる)、カトルメールの批評を中心に見ていくことにする。

カトルメールのスカモツツィ批評には、肯定的なものと否定的なものが見られる。肯定的な批評としては、その主著『体系的 (分野別) 百科全書』の縮訳版『建築歴史辞典 (Dictionnaire Historique d'Architecture)』(1832) のなかに次のような文節がある。「スカモツツィの近代の最も博学な建築家のひとりであるという価値は否定できない」¹⁹⁾。この文節は、フランス建築アカデミー創設時、厳格な古典主義を推奨していた N.F.ブロンデルのスカモツツィに対する評価と一致している。N.F.ブロンデルは、スカモツツィを、建築理論の分野における権威者とみなしていた。カトルメールは、N.F.ブロンデルの示唆を受け、スカモツツィを権威者のひとりと認めたが、しかし、その他の優れた建築理論家と同様の地位は与えていない。カトルメールはスカモツツィの『アイデア』を、「不完全な作品」²⁰⁾あるいは「全く異なるやり方で解釈する必要があったであろう、多くの概念や出来事や所見や冗長な説明などの無秩序な混合物」²¹⁾と評し、N.F.ブロンデルとは異なる視点²²⁾で、『アイデア』を捉えた。カトルメールの視点には、ミリーツィアとテマンツァのスカモツツィ伝があった。カトルメールは、N.F.ブロンデルの権威主義的趣向をはなれ、自身の公正な批評を証明するために、すでにスカモツツィに酷評を与えていたミリーツィアとテマンツァのスカモツツィ批評を参照し、確証を得たとされている²³⁾。

またカトルメールは、同書において、さらに『アイデア』を深く読み取ろうとしている。カトルメール曰く、「スカモツツィの名誉に傷を負わせることができるものがあるとしたら、それは余りにも熱烈

な野心と底なしの活動力である。これらは彼に、あまりにも多くのことに着手させ、多種多様な仕事を背負わせ、様々なところであらゆる種類の方法を活用させ、そして芸術の諸々の領域において名声につながるすべての道を歩んでいきたいと思わせるように仕向けたのである」²⁴⁾。更には、「建築の実践的な仕事に芸術家の資質を完全にするであろう理論研究を結び付けることに満足せず、古代と近代の歴史研究を包含し、なおかつ言語の知識、記念碑に関する批評、そして全民族の作品間の重大な比較をも必要とするあの学術的領域において、彼は卓越したいと望んだ。周知の通り、まだ若かりし頃の彼は壮大な作品の計画を構想した。この作品は、それに与えられた主題およびこの主題に込められた理念にふさわしくするために、まさしく生涯を捧げる以上のものが必要であったらうし、彼が各国において行った旅行や、訪れた先の国家情勢が彼に授けたものよりも勝る手段も必要であったらう」²⁵⁾。カトルメールは、スカモツツィの野心と博識に着目しつつも、これらが空回りをして、『アイデア』が形成されたことを指摘している。これが、カトルメールが我々に伝える『アイデア』像の骨格となるものである。カトルメールは、こうしたスカモツツィの本質を「vanité (虚栄心)」(これはミリーツィアの「vanità」に由来していると思われる) としている。この「vanité」という言葉から、すでに紹介したシュトゥルムの見解が思い出される。それは、シュトゥルムが『アイデア』に見出した「完全に不相応な宝飾品を見せびらかすこの者が犯した過ち」という表現であるが、カトルメールは、読解を通じて看取したシュトゥルムの印象と同じものを、『アイデア』像 (延いてはスカモツツィの建築家・人間像) を大きく規定するであろう精神的側面から印象づけたのである。

2-3. イタリア

祖国イタリアにおける『アイデア』批評は、18世紀のミリーツィアを待たねばならないが、スカモツツィ批評についてはスカモツツィがまだ若かりし頃から見られる。スカモツツィと同時代人であるロドヴィーコ・ロンコーネ (Lodovico Roncone) は、建築書の監修者として高名であったフランチェスコ・デ・フランチェスキ (Francesco de' Franceschi) に宛てた手紙において、スカモツツィを「特筆すべき卓越した知性を持った……我々の時代のウィトルウィウス」と紹介した²⁶⁾。また、同じく同時代人ジローラモ・ポッロ (Girolamo Porro) は、友人に宛てた書簡において次のようにスカモツツィを批評している。「これらの素描に何らかの表明をもって精神を付与することは、私には必要なことのように思われます。なぜなら、この若者が、単に画家としての能力をもっているだけではなく、建築家としての能力をも兼ね備えているからです。このことを見出したとき、私の幸運が、建築家ヴィンチェンツォ・スカモツツィ氏とお話する機会を、氏がローマから帰省されて間もなく、この町に身を落ち着かせることに専心されていたときにもたらしてくれたのです。あるいは「(スカモツツィは) 大変美しい秩序をもって、古代の作家たちの権威とともに各時代に現れ、既にローマが有している古代の遺跡を論じています」²⁷⁾。これらの文節からもわかるように、『アイデア』が刊行されていない当初、イタリアにおけるスカモツツィ批評は、肯定的なものであった。

紀元前二世紀以来の伝記記述の伝統は、時代を下るにつれて、ま

すまず盛んになった²⁹⁾。そして、スカモッツィ伝は、1768年、ミリーツィアによってようやく紹介された。芸術理論家・作家ミリーツィアは、『有名建築家列伝 (Le Vite de' più celebri Architetti)』(1768)のなかで、「ヴィチェンツァの人、ヴィンチェンツォ・スカモッツィ」と題したスカモッツィ伝を著している。このスカモッツィ伝には、父親のドメニコ (Giovanni Domenico Scamozzi, 1526-1582) から教育を受けた十代の頃の様子、高名な教父の下で数学を学び、古代遺跡を描写したローマ旅行の様子、『イデア』執筆の経緯、各地で実施した建築作品などが紹介されている。ミリーツィアはカトルメールと同様 (むしろカトルメールがミリーツィアのスカモッツィ伝を参照したのであるが)、スカモッツィの多忙さが『イデア』執筆の弊害になっていることを指摘している。周知のとおり、スカモッツィは、当初、『イデア』を十二の書に分割しようとしていた。しかし、後にこれを十書に改めたが、結局完成したものは六書分の建築書であった。

スカモッツィ伝の最後の方に、ミリーツィアは所見を認めている。ミリーツィアは、「スカモッツィは卓越した建築家であり、並外れた功績を残した」³⁰⁾ことは認めている。また、スカモッツィの建築作品を「簡素で威厳に満ち誠実である」³¹⁾とも評価している。しかしながら、こと『イデア』に関しては、これら肯定的な評価すべてを打ち消すほどの評価を下している。ミリーツィア曰く、「vanità (無定見) は彼の精神的特徴であり、しかもその vanità はうまく自制されず整理されないまま、かくも気どった博学ぶりの『普遍的建築のイデア』を飾り立てるに到った」³¹⁾。

このようにミリーツィアは、スカモッツィに「vanità」という内的な特徴を見出し、この特徴が『イデア』を飾り立てていることを指摘した。この「vanità」という言葉は、言わばスカモッツィの代名詞のようなものとなっている。

ミリーツィアと親交の深かった建築家・建築技術者・作家トンマゾ・テマンツァ (Tommaso Temanza, 1705-1789) は、その著『ヴェネツィアの有名建築家・彫刻家列伝 (Vite dei più celebri Architetti, e Scultori Veneziani)』(1778)のなかで、「ヴィチェンツァの建築家ヴィンチェンツォ・スカモッツィの生涯」(1770)を著している。このスカモッツィ伝は、マリエッテやミリーツィアから提供された資料をもとに、著されている³²⁾。テマンツァは、スカモッツィの『イデア』を次のように批評している。「それは虚飾に満ちた博識であり、しかも大部分は誇張され的外れである」³³⁾。この文節を見るとわかるように、先ほどのミリーツィアの見解とほぼ一致している。ミリーツィアとテマンツァはともに、『イデア』にスカモッツィの偽りの博識を見出したがゆえに、酷評を与えなければならなかった。

またテマンツァは、否定的な評価と同じだけ、公正に肯定的な評価をも述べている。「その目に映る如何なるものに対しても、彼は熟考した。役に立たないと思われるものでも、古代の遺物についても、彼は熱心に調べ、それらを理解していた」³⁴⁾。また、「我々の建築家がウィトルウィウスを大いに研究し、それを大変よく理解していたことがわかる。……明白と思われることは、彼が大いに熟慮しつつ、この書物を精読していたことであり、更にはそれが、偉大なる成果に結びついていることである」³⁵⁾。こうして肯定的な評価を添

えているところはミリーツィアと同様であるが、テマンツァの場合には、より具体的な批評がなされている。この相違は、テマンツァがマリエッテから提供された『イデア』の手書きの原稿の写しを所有していたということにある³⁶⁾。『イデア』の原稿を閲読したテマンツァは、スカモッツィの真摯な研究態度を看取り、この部分を肯定視したのである。

3. 総評

スカモッツィの『イデア』批評を、その出版背景と各国の批評を通して見てきたわけだが、『イデア』に対する評価があまりにも低かったことに改めて驚かされる。早くからオーダーに関心を寄せていたオランダ、イギリスの建築関係者においては、『イデア』の出版の経緯を見ると、他のイタリア・ルネサンスの建築家と同様、等しくスカモッツィにも高い評価を与えていたことがわかる。しかし、『イデア』は時代の要求にあわせて形を変え、出版されつづけたが、いずれも忠実な翻訳、改訂は行われず、実用性を高めるために、難解な部分や冗長な部分が排除され、図版中心のものとなった。こうした背景には、実用性を求める建築業者の要求が配慮されていることは言うまでもないが、後の批評家が示したような、『イデア』の問題点が関係していることは容易に想像することができるであろう。例えば、C.ダンケルツ版には、一部のイタリア語がそのまま残されている。しかしながら、第六書の普及状況を考慮すると、オーダーに関する様式論という視点で、スカモッツィ研究の可能性が開かれるとも考えられる³⁷⁾。

『イデア』像を直接形成していったドイツ、フランス、イタリアの批評家には、『イデア』への類似した否定的な評価が見られた。『イデア』への否定的な批評を最も早く主張したと思われるシュトゥルムは、当初、N.F.ブロンデルに追随し、スカモッツィに高い評価を与えていた。しかし、その後、『イデア』に「完全に不相応な宝飾品」を見出し、スカモッツィに否定的な評価を与えた。カトルメール、ミリーツィア、テマンツァ、いずれの批評家も、シュトゥルムとほぼ同じ評価を示した。シュトゥルム同様、N.F.ブロンデルに依存していた当初のカトルメールは、スカモッツィを肯定視していた。しかし、スカモッツィが近代の博学な建築家のひとりであるという事実は否定できないものの、カトルメールは『イデア』にスカモッツィの「vanité」を見出し、これをその建築家像 (あるいは建築家像をも包摂する人間像) の本質とした。ミリーツィアにあっては、スカモッツィの建築作品から建築家としての卓越さを見出す一方で、既に『イデア』のなかに、スカモッツィの「vanità」を見出していた。『イデア』の原稿の写しを所有していたテマンツァは、そこにスカモッツィの真摯な研究態度を見出し、高く評価した。だが、一方で、『イデア』に「虚飾に満ちた博識」を見出し、スカモッツィを否定的に評価した。

結. スカモッツィ研究の可能性

こうした『イデア』に、果たして我々は、スカモッツィ研究の可能性を見出すことができるであろうか。現在のイタリアにおけるスカモッツィ研究は、以前とは研究方法が大きく変化している。これまでは、伝記の記述や『イデア』の改訂版を制作するために、必然

的にスカモッツィの内面性や『アイデア』の問題点が取り上げられてきた。しかしながら、1950年代以降では、すでに否定的な評価を下された事実はそのまま受け止められ、ミリーツィアが定義した「vanità」によって構成された『アイデア』の研究よりも、むしろ、肯定的な評価を与えることのできる建築作品や、精細なデマンツァのスカモッツィ伝を母体とした、スカモッツィの美点を証明するための史的事実の収集といった、周的研究が目立っている。スカモッツィに関する論文を数多く著しているパッラーディオの研究者としても名高いフランコ・バルビエーリ、ジャンジョルジョ・ツオルツィ、リオネッロ・ブッピを例に挙げると、たとえばスカモッツィに関する総括的な論文をまとめたバルビエーリは、史的事実の紹介や、『アイデア』については、理論的内容には深く触れず、重要な概念を抽出し紹介するにとどめている。ツオルツィは、多面に渡る数多くの資料をもとに、スカモッツィの青年期にまつわる史的事実を紹介している。これは、スカモッツィの卓越した部分を青年期に遡って考察したものである。ブッピは、『アイデア』に見られるスカモッツィの主義的傾向（精神的側面）を考察し、ミリーツィアやデマンツァが見出した精神的な傾向を、ツオルツィの研究を通して証明している³⁸⁾。

このような現在の研究動向を見てもわかるように、そこには客観的な評価が先行し、スカモッツィの建築観は体系的に把握されておらず、その研究は未だ始まりの段階にあるように見受けられる。このような状況を考えると、優れた諸論者の批評を謙虚に受け止めながら（すなわちスカモッツィの「vanità」に惑わされずに）、まずはスカモッツィの明確な建築理論や建築思想を考察し、その美点を改めて問いなおす必要があるであろう。この二つの問題（建築理論と建築思想）は、これまで不透明であったスカモッツィの建築観を浮かび上がらせるのである。イタリア・ルネサンス最後の建築家・建築理論家の意義、あるいはヨーロッパ各国にもたらした文化的反映、スカモッツィ研究にはこれらの大いなる可能性が秘められていると思われるが、これらはスカモッツィの建築理論や建築思想を明らかにした後はじめて、問うことのできる問題であると考えられるのである。

したがって次には、その建築理論および建築思想を解明するべく、それらに関する重要な概念を『アイデア』から抽出し、考察していきたい。

註

- Andrew Hopkins and Arnold Witte: From Delux Architect - ural Book to Builder's Manual—The Dutch Editions of Scamozzi's L'Idea della Architettura Universale, Quaerendo, XXVI, 1994/6, p. 277.
- C.ダンケルツ版は、『建築芸術の基本原理解あるいは建築の五つのオーダーの卓越さ (Grontregulen der Bow=const ofte De Uytmenen - theyt vende vyf orders der Architectura)』と改題された。
- Hopkins and Witte, op. cit., p. 277.
- ボスブーム版は、『五つの円柱の概説 (Cort onderwys vande vyf Colomen)』と改題された。
- Hopkins and Witte, op. cit., p. 279.
- W.Kuyper: Dutch Classicist Architecture, Delft 1980, pp. 225-226.
- D.ダンケルツ版は、『建築的総合芸術の見本 (Het voorbeelt der Algemeene Bouvvkonst)』と改題された。
- Hopkins and Witte, op. cit., p. 281.
- 詳しくは、Ibid., pp. 281-293を参照されたい。
- フィッシャー版は、『建築の手法 (The Mirror of Architecture)』と改題された。
- ジョン・リーク版は、『五つのオーダーの摘要と概説 (A Brief and Plain Description of The Five orders)』と改題された。
- Eileen Harris and Nicholas Savage: British Architectural Books and Writers 1556-1785, Cambridge University Press, 1990, pp. 409-410.
- Ibid., pp. 408-409.
- ドイツにおける『アイデア』の初版は、1678年、ヨーゼフ・ホフマンが第六書と第三書のドイツ語版を出版している。これは、第六書の内容が第三書に組み込まれた形のものであるが、オランダの典型に従いつつも、オーダーに関する図版、解説を網羅したものである。また、オランダ版では果せなかった、テキストを忠実に翻訳するという功績を、ホフマン版はあげている。オーダーに関しては、全体として、スカモッツィの意向を汲みつつ、「どのようにして自然物全体の中で、オーダーが美的に存在しなければならないか、そして同時に幾つものようなオーダーが建築にはあるか」というように、オーダーを建築的観点から厳密に定義している。Werner Oechslin: Premesse a una Nuova Lettera dell'Idea della Architettura Universale di Scamozzi, in Vincenzo Scamozzi: L'Idea della Architettura Universale, Centro Internazionale di studi di Architettura Andrea Palladio, 1997 (Venezia 1615), p. XVII, fn. 38 参照。
- N.-F.ブロンデルに追隨するシュトゥルムは、「これらの書は（私の）確固たる位置を占めている。それは、私が建築の分野において自らの義務の有用な部分をそれによって組み立てたからである。」と述べている。Oechslin, op. cit., p. XII, fn. 41.
- Ibid., p. XII.
- ゴールドマンの有用性については、以下の引用文により明らかになる。「彼（ゴールドマン）が活用されるならば、いわばヴィニョーラの軽妙さ、パッラーディオの芸術性、スカモッツィの調和の取れた配列は融合されるだろう。」あるいは「市民建築のために次のことを完全に導かなければならない。つまり、五つのオーダーだけではなく、最も卓越した古代の遺跡やウィトルウィウス、ヴィニョーラ、スカモッツィ、パッラーディオ、その他の人々の最も優れた規範をも取り入れなければならない。これら全てはニコラウス・ゴールドマンによって整理され、様々な点で修正され、注釈されるだろう。」(Ibid., p. XII, fn. 43, fn. 47) この文節からシュトゥルムがゴールドマンを高く評価していたことがわかるであろう。このことは次の文節を見ても明らかである。「……公正な評価を下したい者は、ゴールドマンがパッラーディオやスカモッツィのオーダーよりも美しいオーダーを作り出したことを認めなければならない。彼は彼らのように些細なことにこだわって思いにふけることはしない。」あるいは「ゴールドマンの手引きを通じて、私は全てを理解した。」(Ibid., p. XII, fn. 42) このシュトゥルムの所見は、L.Ch.Sturm: Vollständige Anweisung, Alle Arten von regularen Prachtgebäuden nach gewissen Regeln zu erfinden..., Augsburg 1716, a2に収められている。
- L.Ch.Sturm: Ausführliche Anleitung zu der gantzen Civil Baukunst, Amsterdam 1696, p. 1v.; Oechslin, op. cit., p. XVIII, fn. 46 参照。
- Quatremère de Quincy: Dictionnaire historique d'Architecture, II, Paris 1832, p. 418; Oechslin, op. cit., p. XII, fn. 6 参照。
- Quatremère, p. 442; Oechslin, fn. 4 参照。
- Quatremère, p. 417; Oechslin, fn. 5 参照。
- ブロンデルは、規範的なヴィニョーラ、パッラーディオ、スカモッツィのグループと、ウィトルウィウスの翻訳者のグループとを大別し、更に、方法的に完全なヴィニョーラと、訂正が必要なパッラーディオ、スカモッツィとを区別している。Oechslin, Ibid.
- 詳しくは Ibid., p. XIII を参照されたい。
- Quatremère, op. cit., pp. 436-437; Oechslin, op. cit., p. XI, fn. 1 参照。
- Quatremère, p. 417; Oechslin, fn. 3 参照。
- Tutte l'Opere d'Architettura di Sebastiano Serlio Bolognese... Et un'Indice Copiosissimo Raccolto per via di Considerationi da M. Gio. Domenico Scamozzi, Venezia, 1584, p. (a 3 r.); Oechslin, op. cit., p.

- XXI 参照。尚、引用した書簡の文節の原文を付記しておく。“Vitruvio della nostra età... con la grandezza del suo divinissimo intelletto”。この文節は、スカモッツィが父親のドメニコとともに、セールリオ全集を編集していた際、ロンコーネがフランチェスキに宛てたセールリオ全集の刊行依頼書に記されていた言葉である。スカモッツィは1578年から二年間ローマ旅行を行っており、この後にドメニコの編集作業を手伝っていることから、1580年ごろから刊行時の1584年の間のスカモッツィへの印象であったと考えられる。『ローマの遺跡に関する論考』(1582)の執筆や『イデア』の構想のきっかけを与えたローマ旅行は、スカモッツィに、古典主義的建築家としての自覚を促したものと考えられている。詳しくはGiangiorgio Zorzi: *La Giovinezza di Vincenzo Scamozzi Secondo Nuovi Documenti II*, in *Arte Veneta, Rivista di Storia dell'Arte*, XI, 1957, p. 119を参照されたい。
- 27) Gioramo Porro: *Al Cra. s. Giacomo Contarino, fu del Clarissimo Sig. Pietro, Senator Veneto, Signore et Padrone Osservand*, in Vincenzo Scamozzi, *Discorsi sopra l'Antichità di Roma*, Edizioni il Polifilo, Milano, 1991 (Venezia 1583), n. pag. これは、1581年、友人のジャコモ・モンタリーニに宛てた手紙の文節である。この手紙の内容は、翌年に出版されたスカモッツィ著『ローマの遺跡に関する論考』の冒頭に付記された。こうした経緯からスカモッツィとポッロが深い親交にあったことが想像できる。
- 28) 伝記の起源はおおよそ紀元前2世紀頃であるとされている。美術家個人が闇に埋もれていた中世を経て、15世紀を迎え、紀元1世紀のローマ人プリニウスの『自然博物誌』所収の伝記を範としたギベルディの『回想録』が著された。16世紀にはこれらの集大成として、「美術史の父」ヴァザーリが『美術家列伝』を著し、伝記の形式が確立された。17世紀にはヴァザーリを範としたローマの画家ジョヴァンニ・バリオーネやジョヴァンニ・パッティスタ・パッセリの伝記・列伝などが見られたが、ジョヴァンニ・ピエートロ・ベッローリがこれまでの伝統的な形式に準じながらも新たな視点により列伝を著している。この伝記・列伝の経緯については『文化学年報』(同志社大学文化学会)第四十四輯所収、清瀬みさを著「十七世紀イタリアの美術家列伝をめぐって一考察—ベッローリの歴史的意義について—」を参照。
- 29) Francesco Milizia: *Le Vite de' più celebri Architetti d'ogni nazione e d'ogni tempo precedute da un saggio sopra l'Architettura*, Roma 1768, p. 311; *Memorie Degli Architetti Antichi e Moderni*, II, Arnaldo Forni Editore, 1978, Ibid., p. 311; p. 88.
- 30) Ibid.
- 31) Ibid. ミリーツィアの批評にある「vanità」は、カトルメールの「vanité (虚栄心)」とは若干意味が異なると思われる。ミリーツィアにおいては、「inconsistenza, in senso strettamente materiale」(*Dizionario della lingua italiana, le monnier firenze*, 1971), すなわち「無定見」と捉えられる。
- 32) Oechslin., op. cit., p. XIII, fn. 14.
- 33) Temanza, op. cit., p. 422.
- 34) Ibid.
- 35) Ibid., pp. 473-474.
- 36) テマンツァがマリエッテから提供された『イデア』の原稿を持っていたという事実は、以下の文節により明らかになる。「パリのマリエッテ殿は、不完全で未完成のこの著作〔訳註:『イデア』〕の最初の下書きを所有されています。」(Ibid., p. 446.) また、友人に宛てた1765年5月4日の手紙には、「とても思いやりのある親友のマリエッテ氏は、私に、彼が所有している建築およびこの建築家の理念というタイトルが付けられた作品の下書きの要約を授けてくださいました。その要約に私は、私が持っていなかった多くの情報や興味深い事柄の全てを発見したのです。」と認められている。Oechslin, op. cit., p. XIX, fn. 54 参照。
- 37) 実際、土居義岳助教授によって、スカモッツィのオーダー論がフランス建築アカデミーに与えた影響が体系的に論じられている。詳しくは、建築史学、第十七号、1991年9月所収の土居助教授の論文を参照されたい。
- 38) この三者のスカモッツィ関連の論文等を紹介しておく。
Franco Barbieri: *Vincenzo Scamozzi Studioso ed Artista I, II*, in *La Critica d'Arte*, 1949, XXIX (I), pp. 222-230, 1949, XXX (II), pp. 300-313; Vincenzo Scamozzi, *La Cassa di Risparmio di Verona e Vicenza*, 1952; *Alcune Restituzione allo Scamozzi*, in *Odeo Olimpico*, V, 1965a, pp. 27-43; Giandomenico e Vincenzo Scamozzi, in *Vicenza Illustrata*, N. Pozza, Vicenza, 1976, pp. 308-323.
Giangiorgio Zorzi: *La Giovinezza di Vincenzo Scamozzi Secondo Nuovi Documenti*, I, II, in *Arte Veneta, Rivista di Storia dell'Arte*, X (I), 1956, pp. 119-132, XI (II), 1957, pp. 119-128.
Lionello Puppi: *Vincenzo Scamozzi Trattatista nell'Ambito della Problematica del Manierismo*, in *Bollettino del Centro Internazionale di Studi d'Architettura A. Palladio*, IX, 1967, pp. 310-329; *Sulle Relazione Culturali di Vincenzo Scamozzi*, in *Ateneo Veneto*, VII n. s., 7, 1-2, 1969; *Novità per Michele Sanmicheli e Vincenzo Scamozzi appresso Palladio*, in *Storia dell'Arte*, 26, 1977, pp. 11-22.

(2002年1月7日原稿受理, 2002年5月1日採用決定)